

平成23年12月1日

平成23年度日本芸術院会員候補者の決定について

日本芸術院（院長 三浦朱門）は、芸術上の功績顕著な芸術家4名を、日本芸術院会員候補者として決定いたしましたので、お知らせします。

1. 日本芸術院会員候補者の決定について

日本芸術院は、平成23年11月4日開催の会員候補者選考委員会にて選考の上、会員総会の承認を得て平成23年11月25日に4名を日本芸術院会員候補者として決定しました。

今後、日本芸術院長から文部科学大臣に上申し、平成23年12月15日付けをもって文部科学大臣より発令の予定です。

2. 会員候補者について（会員候補者の略歴・賞歴等は別添資料を御覧ください。）

第一部（美術）	第四分科（工芸）	いとう ひろし 伊藤 裕司 (本名：伊藤 裕允)
第二部（文芸）	第七分科（小説・戯曲）	やま さき まさ かず 山崎 正和
第三部（音楽・演劇・舞踊）	第十分科（能楽）	とも えだ あき よ 友 枝 昭 世
	第十五分科（舞踊）	はな やぎ じゅ すけ 花 柳 壽 輔 (本名：花柳 寛)

<担当>文化庁文化部芸術文化課
課長：山崎 秀保（内線 2822）
課長補佐：山崎 英司（内線 2823）
総務係長：伊野 哲也（内線 2825）
電話：03-5253-4111（代表）
日本芸術院
事務長：内山 芳樹
電話：03-3821-7191

工 芸

い とう ひろ し
伊 藤 裕 司

(本名 い とう ひろ のぶ
伊 藤 裕 允)



推薦理由

氏は、京蒔絵の基礎を修得し、一貫して色漆を主体に伝統の蒔絵技法に加え、多様な素材を駆使し、独自の技法を創出して次々と多くの秀作を発表してきた。

特に近年は、日本最古の歴史書である古事記に主題を求めて、そこに登場する数々のエピソードを氏独自の現代に切り込む斬新な表現力で連作を発表し、漆芸に新しい道を拓き、今もやむことのない旺盛な創作力は高く評価されている。

【略歴】

昭和5年9月3日 京都府生まれ 81歳

- 昭和28年 京都市立日吉ヶ丘高等学校卒業
- 昭和28年 山崎覚太郎に師事
- 昭和28年 第9回日展初入選(「山海譜」に対して)
- 昭和39年 第3回日本現代工芸美術展初入選(「蝕」に対して)
- 昭和45年 京都工芸美術作家協会理事(同47年監事、同49年まで、同59年理事、平成6年副理事長、同10年理事、現在まで)
- 昭和46年 第10回日本現代工芸美術展審査員(後4回)
- 昭和47年 第4回日展審査員(後3回)
- 昭和59年 (社)現代工芸美術家協会理事(同61年参事、平成20年理事、現在まで)
- 平成4年 (社)日本漆工協会常務理事(現在まで)
- 平成9年 (社)日展評議員(同16年理事、同23年参事、現在まで)

【賞歴】

- 昭和41年 第5回日本現代工芸美術展現代工芸特賞・読売新聞社賞(「馬」に対して)
- 昭和41年 第9回日展特選・北斗賞(「刻象・大地—その内なるもの」に対して)(後1回)
- 昭和58年 第15回日展会員賞(「収穫」に対して)
- 平成2年 京都府文化賞功労賞
- 平成7年 京都市芸術功労賞
- 平成9年 第36回日本現代工芸美術展文部大臣賞(「涛」に対して)
- 平成12年 文化庁長官表彰(漆芸作家)
- 平成14年 第10回漆の美展林野庁長官賞(「揚羽の軌」に対して)
- 平成16年 第60回日本芸術院賞(第35回日展「スサノオ聚抄」に対して)
- 平成16年 第12回漆の美展農林水産大臣賞(「鉄仙花手文庫」に対して)

小説・戯曲

やま ざき まさ かず
山 崎 正 和



推薦理由

氏は台詞を生体とする正統的な劇作を書き続け、日本文学に本格的な劇的言語を確立すべく努力を重ねてきた。代表作『地底の鳥』、『オイディプス昇天』、『獅子を飼う』をはじめ、多くの作品において、近代日本の演劇に欠落しがちな知性の高さと観念性の豊かさと華やかさをもたらすことに成功した。こうして氏は、世阿弥や竹田出雲による日本古来の演劇の伝統と古代ギリシア以来のヨーロッパ演劇の系譜とを緊密に結合することによって、近代日本文学の脆弱な部分であった戯曲のジャンルを盤石なものとするのに大きく貢献したと認められる。

また、批評家としての氏は、着実な思考と高い教養と鋭敏な感受性を統合して日本文学を指導し続け、『不機嫌の時代』から『装飾とデザイン』に至る絢爛たる一系列の作品は、批評という知的探求とエッセイという藝の遊びとを優雅に結びつけた近代日本批評の異色かつ、頂点である。

【略歴】

昭和9年3月26日 京都府生まれ 77歳

- 昭和31年 京都大学文学部哲学科卒業
- 昭和39年 米国イェール大学演劇科留学（フルブライト研究員として同41年まで、同42年同大学東洋学科客員講師、同43年まで）
- 昭和44年 関西大学文学部助教授（同49年教授、同51年まで）
- 昭和47年 劇団『手の会』結成・代表（同57年まで）
- 昭和49年 米国コロンビア大学東洋学科客員教授（同49年まで）
- 昭和51年 大阪大学文学部教授（平成7年名誉教授、現在まで）
- 昭和54年 (財)サントリー文化財団理事（平成22年副理事長、現在まで）
- 平成3年 (財)兵庫現代芸術劇場芸術監督（同15年芸術顧問、同18年まで。同18年兵庫県立芸術文化センター運営委員、現在まで）
- 平成7年 東亜大学大学院教授（同12年学長、同17年まで）
- 平成11年 (財)兵庫県芸術文化協会理事（同23年まで。同23年公益財団法人へ移行、同23年評議員、現在まで）
- 平成13年 経済産業省参与（現在まで）
- 平成13年 中央教育審議会委員（同19年会長、同21年まで）
- 平成18年 兵庫県参与（現在まで）
- 平成18年 文化功労者

【賞歴】

- 昭和38年 第9回「新劇」岸田戯曲賞（戯曲「世阿弥^{ぜあみ}」に対して）
- 昭和47年 第22回芸術選奨文部大臣新人賞（評論「劇的なる日本人^{かちょう}」に対して）
- 昭和48年 第24回読売文学賞・評論・伝記賞（「鷗外 闘う家長」に対して）
- 昭和49年 第28回芸術祭賞優秀賞（手の会第三回プロデュース公演「実朝出帆」の戯曲に対して）
- 昭和50年 第29回毎日出版文化賞（「病みあがりのアメリカ」に対して）
- 昭和59年 昭和59年度吉野作造賞（評論「柔らかい個人主義の誕生」に対して）
- 昭和60年 第36回読売文学賞戯曲・シナリオ賞（「オイディプス昇天」に対して）
- 平成5年 大阪文化賞（「演劇学」に対して）
- 平成11年 紫綬褒章
- 平成23年 第67回恩賜賞・日本芸術院賞（戯曲及び評論の長年の業績に対し）

能 楽

とも えだ あき よ
友 枝 昭 世



推薦理由

氏は、熊本藩細川家お抱えのシテ方喜多流の名家に生を受け、若年より喜多流十五世宗家喜多実師（芸術院会員）の膝下に研鑽を積み、師の伝承に厳正忠実にして端正重厚な芸風を体得、早くより直門筆頭の逸材として囑目され、心身錬磨怠らず、父君友枝喜久夫氏の、喜多六平太師譲りの絢爛自在な風を併せて、独自の芸を確立した。

心技相和する数々の優れた舞台成果により、日本芸術院賞、重要無形文化財保持者各個認定（人間国宝）等、数々の榮譽を受け、技芸は固より、人格識見よりして、当代能楽界屈指の演者たることは、万人等しく認めるところである。

【略歴】

昭和15年3月24日 東京都生まれ 71歳

- 昭和21年 能楽シテ方喜多流十五世宗家喜多実^に師事
- 昭和22年 「鞍馬天狗」の子方（花見）で初舞台
- 昭和25年 「西王母」で初シテ
- 昭和37年 國學院大学文学部卒業
- 昭和39年 ニューヨーク高等演劇研究所に招聘、能楽指導（後各地公演）
- 昭和49年 アメリカ公演（以後、海外公演5回）
- 昭和51年 昭和天皇陛下御在位50年奉祝能（東宮御所）
- 昭和56年 （社）能楽協会理事（同60年常務理事、同62年まで）
- 昭和57年 重要無形文化財「能楽」（総合認定）保持者
- 平成5年 喜多流職分協議会（現 喜多流職分会）代表（現在まで）
- 平成7年 （財）十四世六平太記念財団理事（同23年まで。同23年公益財団法人へ移行、同23年常務理事）
- 平成20年 重要無形文化財「能シテ方」（各個認定）保持者

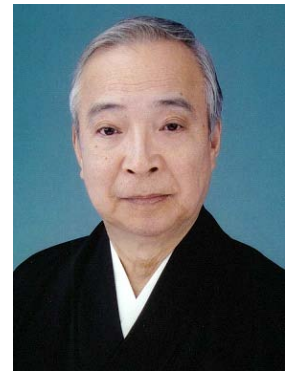
【賞歴】

- 昭和53年 第28回芸術選奨文部大臣新人賞（「烏頭^{うとう}、新^{しん}作^{さく}能^の「復活」等の演技に対して）
- 平成7年 第45回芸術選奨文部大臣賞（「芭蕉^{はしやう}」、「井筒^{いづつ}」、「野宮^{ののみや}」等の演技に対して）
- 平成7年 第16回観世寿夫記念法政大学能楽賞（「芭蕉^{はしやう}」、「野宮^{ののみや}」等の演技に対して）
- 平成12年 紫綬褒章
- 平成15年 第59回日本芸術院賞（能楽界の発展に尽くした業績に対して）
- 平成16年 伝統文化ポーク大賞（能楽シテ方の伝承・振興）
- 平成20年 学校法人國學院大学有栖川宮記念賞

舞 踊

はな やぎ じゅ すけ
花 柳 壽 輔

(本名 花柳 寛)



推薦理由

氏は四世花柳芳次郎氏の長男として生まれ、幼少より伯父二世花柳壽輔氏に師事、若年より多数の新作舞踊を発表する。その構想と斬新さは瞠目され活躍していたが、平成19年三世家元花柳壽輔氏の急逝により四世を継承、花柳宗家家元となり、精力的に日本舞踊の発展に力を注いでいる。「黒塚」「奴道成寺」、復曲「勝三郎舟弁慶」等の演目での格調高い演技は、多くの人の認めるところである。海外公演にも多数参加、また振付の技術も高い評価を得ている。今日まで手がけた舞踊劇は約三百、他に振付、演出の曲数は三千を越す。また流派を越えて日本舞踊協会の新作の制作にも尽力、後進の育成にもあたるなど日本舞踊界を代表する活躍をしている。

【略歴】

昭和6年3月22日 東京都生まれ 80歳

- 昭和10年 二世花柳壽輔に師事
- 昭和11年 「菊づくし」初舞台
- 昭和28年 早稲田大学文学部文学科卒業（同31年同大学院文学研究科修士課程芸術学（演劇）専攻修了）
- 昭和29年 「花柳寛舞踊会」主宰（振付・演技、同44年「花柳芳次郎舞踊会」に改称、多数公演）
- 昭和32年 ブラッセル万国博覧会に日本舞踊使節の一員として渡欧、その後世界各地で十数回公演
- 昭和42年 五世花柳芳次郎襲名
- 昭和53年 第1回日本舞踊協会海外公演フランス（パリ・リール）参加
- 昭和58年 （社）日本舞踊協会理事（平成5年常任理事、現在まで）
- 昭和62年 私塾「花柳芳次郎舞踊塾」主宰（現在まで）
- 平成元年 東京芸術大学非常勤講師（同3年まで、同5年から同10年まで）
- 平成2年 全日本舞踊連合参与（同16年副会長、同20年会長、現在まで）
- 平成19年 花柳芳次郎改め初世花柳寛應を名乗る
- 平成19年 花柳流四世宗家家元花柳壽輔襲名
- 平成21年 （社）日本演劇協会理事（現在まで）
- 平成23年 東京芸術文化評議会評議員（現在まで）

【賞歴】

- 昭和34年 第13回文部省芸術祭奨励賞（創苑公演「おたかの泉」の振付と演技）
- 昭和37年 ザルツブルグテレビオペラ賞コンクール1位（NHKテレビオペラ「綾の鼓」の振付）
- 昭和60年 国際エミー賞公演芸術部門優秀賞（NHKテレビ創作舞踊「無明」の振付）
- 平成元年 イタリア賞（NHKテレビ創作舞踊「カルメン」の振付）
- 平成11年 第21回舞踊批評家協会賞（「一の物語」などでみせた創作）
- 平成11年 平成11年度東京新聞舞踊芸術賞
- 平成13年 第57回日本芸術院賞（日本舞踊の伝承と発展に尽くした業績に対して）
- 平成18年 旭日小綬章

[参考資料]

(1) 概要

日本芸術院は、日本芸術院令第3条に基づき、芸術上の功績顕著な芸術家のうちから補充すべき会員を毎年会員による選挙を行い決定しています。

日本芸術院は、その前身である帝国美術院が森鷗外を院長として大正8年に創設されて以来、現在まで約90年の歴史を持ち、日本芸術院会員への選考は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等の芸術各分野の芸術家から栄誉あることとして広く認識されています。

日本芸術院会員は、一般職の国家公務員（非常勤）で、年金額は250万円、任期は終身です。

(2) 選考方法

日本芸術院会員候補者の推薦は、毎年度、日本芸術院会員により行われ、全会員で組織する会員候補者選考委員会において選考します。日本芸術院は、各部毎の選考、総会による承認をもって会員候補者を決め、その候補者について、各部毎における会員による投票を経て総会の承認を得ることにより決定します。

(3) 選考経過

①平成23年9月9日(金)から9月22日(木)までの間、日本芸術院会員に対し候補者の推薦を求めたところ、第一部（美術）6名、第二部（文芸）5名、第三部（音楽・演劇・舞踊）5名、計16名の推薦がありました。

②平成23年11月4日(金)に開催した全会員で組織する会員候補者選考委員会において、16名の被推薦候補者の中から、第一部6名、第二部5名、第三部5名、計16名の会員候補者を選考しました。

③会員候補者16名について、平成23年11月4日(金)から11月11日(金)にかけて、各部ごとに投票を行い、平成23年11月14日(月)開催の部長会議において開票した結果、第一部1名、第二部1名、第三部2名、計4名が各部会員の過半数を得て当選し、会員候補者に内定しました。

④会員総会の承認

内定者について、平成23年11月25日(金)、書面による会員総会の承認を得て、会員候補者として決定しました。

(4) 会員数

芸術院会員（定員120名）は、第一部（美術：定員56名）は現員50名に1名が加わり51名、第二部（文芸：定員37名）は現員33名に1名が加わり34名、第三部（音楽・演劇・舞踊：定員27名）は現員23名に2名加わり25名となり、現員110名となります。